別子銅山を読む解説講座５

古 田 俊 之 助 氏 追 懐 録

平成２７年２月２１日(土)10:00～11:30
元別子銅山文化遺産課長　坪井利一郎

１．はじめに

七代目の総理事というよりも最後の住友総理事との言い方が多いのが古田俊之助である。広瀬宰平以来の住友生え抜きの総理事、技術畑では初の総理事と話題に事欠かないが、解説する本「古田俊之助追懐記」の伝記部分がわずかしかないので、解説するにあたってはたと困った。

古田は、日本が太平洋戦争に突入した昭和１６年(1941)に総理事に就いた。そして、戦後の昭和２１年(1946)には、住友本社を解散した。第二次世界大戦後の混乱期に、家と事業と２０万人の従業員を守り抜き、住友グループのきずなを結び、住友精神の「公利公益」を貫いたトップリーダーの足跡を紐解く。

２．本の刊行

昭和２８年９月　　編纂が企画される。
昭和２９年３月２３日　「古田俊之助追懐録」刊行。没後１周忌に当たる。

３．本の構成

表紙	題字は小倉正恒			
写真	肖像	勉学時代	結婚記念	住友伸銅所時代
	住友伸銅鋼管時代		住友金属工業専務時代	
	住友本社専務理事時代		住友本社総理事時代	
	住友本社生産報国会に臨んで		家庭にて	晩年
序	岡橋　林	５ページ	(岡橋は編纂委員会委員長)	
凡例		１ページ		
目次		１２ページ		
小伝		５３ページ		
追懐録(１・２)		７２１ページ	１２７人	
病気概要		４ページ		
葬儀次第		１２ページ		
略年譜		１０ページ		
後記		２ページ		
奥付		１ページ		

小伝目次

京わらんべ	p. 1～	外遊を転機として	p.24～
茶々丸	p. 5～	満州進出	p.27～
六高より東大へ	p. 7～	住友本社へ	p. 31～
アプレンティス	p. 9～	総理事五年	p. 34～
小畑所長の下に	p.12～	住友財閥の解体	p.42～
試練を越えて	p.14～	追放生活	p.46～
新工場の建設	p.18～	旅に病みて	p.50～
桜島臨幸	p.21～		

４．小伝の概要

京わらんべ

明治１９年(1886)１０月１５日、京都府葛野郡衣笠村に、井上数馬の五男として生まれる。井上家は等持院の寺侍をしていた。

実父・数馬は、京都府舟井郡西田村の農家である西村家の長男に生まれたが、井上家の養子になった。金閣寺街道から氷室へ抜ける街道の建設に貢献する。実母・エンは、１５歳で数馬を婿に迎えた。二人には６男３女の子宝があった。

明治２６年(1893)春、衣笠村立平野小学校に入学。在学中に郡長から優等生として表彰された。

明治３０年(1897)春、京都市立第一高等学校に入学。

［江戸時代に、門跡寺院や格式の高い寺に仕えて、警護、寺務などに当たった武士。］

茶々丸

明治３２年(1899)春、　大阪の北野中学校に入学。

５月、大阪市北区福島の古田敬徳の養子となった。

始めは同村で特別親交があった橋本吉幸から平野小学校の校長をしていた長男の幸之助に養子を世話してほしい依頼があった。すでに吉幸の娘の正子が敬徳の養女になっていて、成績優秀な俊之助に懇願した。

あだ名が「茶々丸」。

［茶々丸：織田信長か豊臣秀吉かの小姓で、滑稽で機知に富んだ茶々丸から命名。］

六高より東大へ

明治３７年(1904)春、　成績３番で中学校を卒業。

９月、古田家出身の岡山の第六高等学校に入学。

明治４０年(1907)夏、　東京帝国大学採鉱冶金学科に入学。

明治４１年(1908)６月、２年生の時に古田正子と結婚。

明治４３年(1910)７月、成績２番で卒業。

アプレンティス

明治４３年(1910)９月、住友に入社、伸銅課に勤務。海軍の兵器自立方針に従って鋳造と管棒の工場を担当していた。新進工学士の古田に鋳造を担当させた。小吹炉から始め、傭外国人のハザウエーについて一職工として徹底的に技術を習得させられた。

電線技術導入時に、社員が傭外国人のゴダードの学問を軽蔑して本気で技術を修得しようとしなかった反省からであった。溶鉱炉作業の中でも最もきつい労働であったが、古田の真面目な態度に対してハザウエーも真剣に指導した。契約外の坩堝(るつぼ)炉の熔銅法も教えてくれた。この３年間は、古田の生涯にとって極めて大きな意味を持った。

[生まれつき、のん気でユーモアに富んだ性格であったが、辛抱強く、慎重な人柄は、厳格な養父母の元での生活により自然と身についた。(「小倉正恒伝古田俊之助伝」栂井義雄)]

小畑所長の下に

大正２年(1913)６月、伸銅所は住友伸銅所となり、小幡文三郎が所長に就任した。

大正３年(1914)３月、シーメンス事件で、山本内閣が総辞職する。伊庭貞剛の薫陶で住友は汚職には潔癖であり、家長は貞剛に感謝の屏風を贈った。古田は住友人としておおいに教訓となった。７月に第一次世界大戦が勃発して、欧米出張が無期延長になった。

大正６年(1916)あたりから大戦景気が沸騰した。増産が需要に応じきれなかった。鋳造担当者として、量・質とも心配をかけなかった。１２月には、将来伸銅所を背負う人と古田に眼をかけていた小幡所長が退職した。

[シーメンス事件：ドイツのシーメンスによる日本海軍高官への贈賄事件である。ヴィッカースへの巡洋戦艦「金剛」発注にまつわる贈賄も絡んで、当時の政界を巻き込む一大疑獄事件に発展した。大正３年(1914)１月に発覚し同年３月には海軍長老の山本権兵衛を首班とする第１次山本内閣が内閣総辞職にまで追い込まれた。]

試練を越えて

大正８年(1919)３月、製造課主任になった。その後、職制変更で製造課長となり、大正１３年(1924)までその地位にいた。デュラルミンのインゴッドの製造を成し遂げた。

大正１０年(1921)頃に、海軍が初めてデュラルミンで全金属飛行機をつくった。

大正１１年(1922)２月、ワシントン軍縮会議の海軍軍縮案の５・５・３の比率が決まり、従業員の縮小整理で苦労する。１１月にはデュラルミンの軟化炉が爆発して死傷者を出す。古田は一切の責任を主張するが、不可抗力の災害と認められる。１２月には総理事が鈴木から中田に譲られた。

大正１３年(1924)春、副支配人兼製造課長に昇格する。

大正１４年(1925)２月、支配人に昇格する。１１月には妻の正子を亡くする。

大正１６年(1927)、長女の貞子を亡くする。

[第一次世界大戦時、ドイツの軟式飛行船ツェッペリンの１隻がロンドン郊外で迎撃され、その骨組に用いられていたジュラルミンの一片が日本に送られてきた。これを入手した海軍当局はその材料の調査研究を住友伸銅所に委託した。伸銅所では、強度や組織を調べて製造方法をけんきゅうし、大正８年(1919)工場施策を完了、９年(1920)には、板、管、棒及び形材が製造できるようになった。]

新工場の建設

大正１４年(1925)６月、大阪市中央市場新設のために住友伸銅所敷地を大阪市に売却する。桜島の新工場の盛り土に着手し、臨時建設部の部長となる。尼崎工場の拡張も着手する。昭和２年(1927)4 月に金融大恐慌が起こる中、安治川の旧工場の生産を落とさないようにしながら、桜島の伸銅工場の建設、尼崎の鋼管工場の建設は尋常のことではなかった。

昭和元年(1926)、住友伸銅鋼管株式会社となる。

昭和３年(1928)３月、能率的な新工場への移行で、組長級を含む人員整理を行う。解雇予定者を集めると表彰でもあるのかと人が勘違いした。５月には舞鶴で建設中の駆逐艦の復水器管に時期割れができて、公式運転、竣工が遅れるという大事件が勃発した。健康を害していたが、担当者を連れて駆けつけ調査し、住友の責任を痛感して陳謝した。各工廠に納入していた復水器管を全部引き取り、低温焼鈍(やきなまし)をやった。当面の問題は１ケ月で解決し、誠意をもっての対策で住友の信用が一段と高まった。

８月、常務取締役になった。１１月、桜島と尼崎の新工場への移転がほぼ終わる。

[時期割れ：金属材料に発生する経年損傷の一種。常温加工の黄銅、洋銀などが時日の経過につれて自然に割れをおこすこと。この割れは、結晶の境界に発生し、酸、アルカリにより促進される。もとは、木材のひび割れに使われた言葉。]

桜島臨幸

昭和４年(1929)春、天皇陛下が産業奨励で大阪に行幸になるとの噂が伝えられた。臨

幸工場は、大日本紡績と住友伸銅鋼管の２工場だけというので、古田は大いに感激した。臨幸１ケ月前には同僚と伊勢大廟に詣でて、水垢離をとった。６月の臨幸では御説明役として新工場を案内した。工場移転、臨幸の準備にと阿修羅のように働いた４年間であった。予定時間を２０分以上超過して、天皇陛下をお見送りすると心身ともに疲れ切っていた。

外遊を転機として

昭和５年(1930)９月、欧米出張の辞令を受けた。航空機の製造に着目していたので、米国を去る頃には金属プロペラ製造の決意を堅くしていた。英語が得意で、英国人から技術指導も受け、交渉、交歓、視察、観光の日々は快適であった。この旅行で心身両面にわたり転機を与えた。

昭和６年(1931)５月、帰国。８月には総理事が湯川から小倉に譲られた。

昭和７年(1932)正月、金解禁実施以来、不況はますます深刻さを加え、住友では全員の昇給を停止した。その中で、カナダのアルミニウム・リミッテッドとの提携を持ち株折半という新しい形で成立させた。満州事変の勃発、満州国の成立を背景に新工場の能力を発揮した。更に設備を拡張した。

昭和８年(1933)正月、専務取締役になった。家長が社長の時代だったので、世間的にいえば社長になったことになる。

[住友ではルイ・ラロックの別子鉱山目論見書に描かれている近代化の実施のために、明治９年(1876)に塩野門之と増田芳造をフランスに派遣している。広瀬宰平は明治２２年(1889)に欧米視察をしている。鈴木馬也も明治２９年(1896)と大正８年(1919)に欧米視察に出ている。小倉正恒も明治３３年(1900)に欧米視察に出ている。欧米に学び近代化を進めた。

三菱では民間で最初の明治５年(1872)に岩崎弥之助がアメリカに留学し、海の事業から陸の事業に転換し多角化を進める。

三井物産では三池炭鉱を手に入れマサチユセッツ工科大学卒業の団琢磨によって工業へ進出している。また、明治２４年(1891)にイギリス留学経験のある中川上彦次郎を招き、経営の大刷新を図り工業化路線を敷く。挫折するも工業化は再興する。

住友、三菱、三井の欧米に学ぶ姿勢は、渋沢栄一と大久木保利光の見聞によると思われる。慶応３年(1867)のパリ万国博覧会にフランス政府から招待された徳川慶喜に代わりに、実弟の昭武が派遣された時に随行した渋沢栄一が、それまでの尊王攘夷運動に傾倒していたが、訪仏でヨーロッパ社会文化に度肝を抜かれたことに依る。四民平等、銀行、合本組織。ヨーロッパに学び日本の発展に寄与する。後に日本資本主義発展の遅々と呼ばれる。

もう一つは、明治４年(1871)の岩倉具視の海外視察に同行した大久保利光が見た英国の富国は貿易と工業化であり、世界最高水準の工業を支えているのは立派な人格者と驚いている。帰国後、殖産興業化路線を打ち出し実践した。

満州進出

昭和８年(1933)頃に伸銅鋼管が、古田宿願の金属プロペラの製造を開始した。中島飛行機がハミルトン固定節プロペラの製造権を持っていたが、木製プロペラが主体だったので本格化する意図が乏しかった。住友もペラ素材を海軍や川西に少量納入するに過ぎなかった。

航空機の発達が急速で、海軍航空本部技術部長・山本五十六から住友へ完成品までの一貫作業の要請があった。古田は２つの条件を出して契約した。そこで住友は、中島飛行機からハミルトンの製造権を買収した。

昭和９年(1934)９月、鞍山に満州住友鋼管株式会社が設立され、専務に就任した。軍人天下の満州への進出に成功し、鞍山に製管所を、奉天に鉄道車両工場、アルミニウムの加工工場を作っていった。１１月に木下愛子と再婚した。

昭和１０年(1935)９月、住友伸銅製管株式会社と住友製鋼所が合併して住友金属工業株式会社となり、古田は専務兼伸銅所長となった

昭和１１年(1936)５月、住友合資会社の理事に就任し、金属専務、満州鋼管専務をしながら住友全般の事業も観ることになった。

昭和１２年(1937)３月、住友合資会社が株式会社住友本社になった。日華事変、日独伊防共協定締結の動きの中、業績は大いに伸張した。しかし、事変による応召者が次第に増えて、仕事に響いてきて新たな苦心となった。

[関東軍の参謀連中は財閥に反感を持っていて「満州国に財閥入るべからず」という垣根を作っていた。財閥の方も満州国の前途に不安を感じていたので、積極的に進出しなかった。しかし、古田は以前から懇意であった関東軍参謀長の小磯国昭中将を通じて進出していった。]

住友本社へ

昭和１３年(1938)１月、株式会社住友本社の専務理事に就任した。金属の実務を離れて本社の仕事を本職としたので、住友各社の取締役の兼務、諸会社の役職、各種の公職に就くことが多くなった。

古田は失敗があっても、責を引き受けて失敗を生かしていった。また、人の意見をよく聞いた。気が付いていることでも、不平不満も温かく耳を傾けたので、信頼と信望を高めていった。

４月には、新居浜に出張し別子銅山を始め、住友五社を視察した。

１１月には、満州住友金属奉天製鋼所の電気炉火入式に臨席し、満州朝鮮の事業地を視察した。翌年１０月には、奉天工場の落成式に臨席し、満州朝鮮を視察した。

この時期、第二次欧州大戦の勃発、日本の仏印進駐、日独伊同盟の調印と戦争は拡大の模様となっていった。

昭和１５年(1940)春、住友金属の第３基地として古田達が計画した和歌山工場が着々と進んでいった。

総理事五年

昭和１６年(1941)４月、近衛内閣入閣で住友を退いた小倉正恒の後に古田が総理事に就任した。広瀬は総理事格の人であったので、古田が初めての住友生え抜きの総理事となったので、親近感は格別であった。古田は専務理事制を廃止して三常務理事制を採用した。就任とともに住友全体に「皇国興廃の関頭に在り、各自の部署で沈着冷静に本文を尽すことを期す」と伝達した。同年、神崎プロペラ製造所、名古屋軽合金製造所、伊丹製作所が開設された。

古田の総理事就任は、独ソ開戦、太平洋戦争突入の年であった。多忙を極め、チェーン・スモーカーが煙草をやめた。我が国経済界が活気を呈していた海外進出の仕事は本社が担当していて、古田の抱負も決して消極的ではなかった。

昭和１６年(1941)１０月、本社と住友化学の共同で熱河蛍石鉱業を設立し、１１月には、蘭印法人スランヂ殖産を設立した。

昭和１７年(1942)以降、フィリピンでは、サンカロビー、スリガオ銅金鉱。セレベスでは、ポマラのニッケル鉱。ジャワでは、ガタパーチャ、バヤの炭鉱。スマトラでは、バリゲ、プマタンシャンタルの植林に優秀な人材を派遣した。太陽丸の遭難もあったが、一時は３００人に及んだ。

２月に満州住友金属常務、満州電線専務を内地へ転勤させると、経済界に北方から南方への転進の企図が見られていたので、住友も利を追って南方へ転身する噂が立った。古田は総理事名代を派遣して不安を一掃した。８月には、鴻之舞金山操業２５周年式に列席し、９月には、満州建国１０周年式典に列席した。

昭和１８年(1943)４月、山本元帥戦死の報を聞いて、心傷に堪えないもののようであった。６月には、名古屋製作所が開設された。

春から夏にかけて政府の強要によって銀行の合併が進められたが、古田はこの難問について意見を慎重に聴取し拒否する裁決をした。

昭和１７年から１８年にかけて、余市鉱山は帝国鉱産へ、静狩金山は日本産金へ経営を委任した。鴻之舞金山は１年後に操業を中止した。朝鮮の高原、宣川、仁興の鉱山も操業を縮小、休止した。飛行機の増産が高まり、１８年１２月には、朝鮮住友軽金属、１９年４月には安東軽金属が設立された。内地では住友化工工業が設立し、住友化学と日本染料が合併した。９月には、住友本社の機能も住友戦時協力

会議に転じることとなった。古田の猛然たる活動ぶりは、まったく疲れを知らない者のようで「タンク」と呼ばれた。全住友の生産会社は軍需会社に指定された。

昭和２０年(1945)５月、ベルリン陥落、７月には、桜島の伸銅所も壊滅した。遂に８月１５日を迎えた。遂に不屈の「タンク」も慟哭した。

住友財閥の解体

終戦直後の住友の在籍従業員は２０万人に達していた。拡張しきった事業の収捨、従業員と家族の取り扱い、住友の全事業を国家再建にどう役立てるか、混迷の中で住友の進む途を明示することが古田の最大の責任であった。占領政策は日本の経済力の粉砕であり、財閥の解体、責任者の戦犯については覚悟をしていた。責任の累が家長に及ぶことを苦悶していた。乱世に無能無策との批判もあったが、住友の先人が築いた名誉と信用を一朝にして傷け去ることを忍びなく思った。「愚を以て之を守る」と正々堂々と進むと腹を決めた。

昭和２０年(1945)１１月、住友本社解体の指令を受けた。総司令部から会見に来た人達も古田の解体受諾の淡々とした態度に深い感銘を受けた。

昭和２１年(1946)１月、古田は住友本社代表取締役並びに総理事を辞し、すべての役員等を辞任した。

昭和２２年(1947)３月、後に残した常務と監事２人も追放の指定を受けた。住友吉左衛門を始め同族の４人には財閥家族の指定があっただけで、戦犯等の心配は消え去った。

昭和２３年(1948)２月、鉱山、金属、化学、電工以下各社が集中排除の指定を受けた。

総理事在職５年間は、住友の内外に死力を尽くして苦難の道を突き進んで来た。何人もこれ以上のことは出来なかったと思う。

［唐の大宗皇帝が、子の高宗皇帝が太子の時に、修身治国の道を教えるために、帝範と題する書の表題の一行より「智慧聡明なるとも之を守るに愚を以てす」を引用して教えた。

人としては智慧聡明でなければならないが、賢さや利巧さを殊更にふるまえば、多くの人は鼻持ちならないと感じる。世間は相手にはしてくれない。

そこで「之を守に愚を以てす」という様に知っても知らぬふりで人に問えば、人は喜んで教えてくれる。それは知識であり、意見であり、忠言であり、自ら知っていることでもあろうが、その姿勢を続けていると、自分にとって有意義なことも取得出来るようになる。狭量で頑迷な独りよがりの天狗にならなくて済む。］

［古田の住友総理事就任は、昭和１６年４月から昭和２１年１月までの５年９ケ

月であった。就任すると太平洋戦争が勃発し軍需生産に追われ、日本が戦争に敗れると財閥を解体という悲運を一身に背負った。]

追放生活

追放中の耐乏生活は、古田を芋づくりの名手にした。経済変革と厳しい税制で南郷山の家の維持も困難になってきた。全くの無収入から解放されるのは、昭和２４年(1949)暮れ、朝日麦酒の監査役に就任してであった。確定収入が入るようになり、ほっとしたのもつかの間の昭和２５年(1950)３月、二度目の妻の愛子夫人が心臓疾患で亡くなった。箪笥には目ぼしい着物はほとんど無かった。三男の敬三夫妻が近くに住んでいたので、寂しい父と妹の世話をした。

追放生活は、読書と工夫と内省の時をふんだんに与えてくれた。

旅に病みて

昭和２６年(1951)８月、追放が解除された。９月には、サンフランシスコ講和条約が調印されて、世の中は漸く明るくなってきた。住友本家から相談役が委嘱された。多岐多端にわたる問題処理を中心になってやっていく。周到な計画を立て、慎重に構えて、徐(おもむ)ろに実行に移していく苦労は人一倍であった。

大阪商工会議所が顧問に迎えた。続いて経済団体連合会と関西経済連合会が顧問に迎えた。新日本化学が取締役に、大阪建物と日本電気が相談役に迎えた。関西経済界の長老といった取扱い方であった。

昭和２７年(1952)６月、吉田首相から内閣経済最高顧問に委嘱され、昭和２８年(1953)３月、通商産業省の顧問に委嘱された。こうなると、住友の古田でなく、関西財界の古田でなく、日本財界の古田と見えてきた。

１１月には、多忙な古田に周りはしきりと再婚を勧め、岩井俊子を三度目の妻に迎える。

昭和２８年(1953)２月、通産省の会合で上京していて発熱、入院。３月２３日に亡くなる。２８日に阿部野で葬儀を行った。法名は實徳院殿大常俊達居士。享年６８歳。

[**住友吉左衛門は挽歌三首を霊前に供えた。**

昭和四年桜島工場に君を識りしより厚き人柄わがたのしみ

敗戦のくるしき時も痩するまでわれを扶けてはらなりにき

酒くみてきみをしのべば傍に君ゐらぐ声ほがらかにきこゆ　]

５．おわりに

「古田俊之助小伝」自体が、古田の生涯の要約であり、解説のために要約をしていても本文そのままが即要約のようであった。時代背景や周辺の人物描写を省くと小伝

になった。それにしても短すぎるので、古田の人物に迫ることが出来なかった。

伝記が小伝となったのは、戦時中の資料が乏しい反映か。苦しい時代を、家庭的にも苦しみを味わいながら住友事業の国家的使命を貫いた人であった。

「別子銅山を読む講座」でこれまでに歴代の総理事の伝記を解説してきた。広瀬宰平の「半世物語」、伊庭貞剛の「幽翁」、鈴木馬左也の「鈴木馬左也」、小倉正恒の「小倉正恒」、古田俊之助の「古田俊之助氏追懐録」。歴代の総理事の経営思想や人となりをまとめた言行録集の本が、昭和６０年に発刊された美里泰伸編著「住友処生術」である。講座のレジュメ集を読んでいる印象を持った。

【参考文献】

小倉正恒伝古田俊之助伝　栂井義雄　東洋書館　昭和２９年１１月２５日

人間古田俊之助　河村龍夫　イゲタ鋼管㈱　昭和３２年　９月２０日

銅・アルミニウムとともに－操業 100 周年記念誌　住友軽金属株式会社　平成　９年　４月　１日

物語　財閥の歴史　中野　明　祥伝社新書　平成２４年　２月１０日

日本の産業革命　石井寛治　講談社学術文庫　平成２４年１２月１０日